AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム（2004.12）５巻１号:88.

【学会の動向】第49回日本不妊学会・第22回日本受精着床学会合同学会報告

千石一雄

旭川医科大学研究フォーラム 5(1) ：88～89，2004

学界の動向

第49回日本不妊学会・第22回日本受精着床学会合同学会報告

千　石　一　雄*

本年、９月２日、３日、４日に旭川市民文化会館、旭川グランドホテルにおいて、石川睦男附属病院長が日本不妊学会の会長、生物学教室上口勇次郎教授が日本受精着床学会の会長として、第49回日本不妊学会、第22回日本受精着床学会合同学会を開催した。両学会は生殖医療また生殖医学に携わる臨床医、研究者が集う日本で最大の生殖医学分野の学会である。両学会とも清水哲也元旭川医科大学学長が昭和60年に第３回日本受精着床学会、平成元年に第34回日本不妊学会を主催しており、私自身も若かりし当時のことを思い出す、大変思い出深い学会である。

本学会は従来、別々に開催されていたが、２年前より同時期に開催するようになり、これまでは３日間の会期を各々１日半ずつ縦割りに開催されていた。本年は、まったくの合同学会を意図として、３日間をパラレルに融合する形でプログラムを構成した。

学会前日の９月１日には来年度からの不妊治療指導医制度の導入のための生殖医療指導医認定試験が予定されており、その前日には折しも台風16号が本道を直撃し、医局員一同、台風情報と航空機の飛行状況に釘ずけになり、最初から荒れる展開に、大いに気を揉んだが、旭川空港上空で何回も旋回したようではあるが、幸いにも飛行機は順調に landing し、学会に大きな支障がなかったことにまず安堵した。

学会初日は天候にも恵まれ、一般演題238題、米国 NIH の Kevin Catt教授、ヘルシンキ大学の Olavi Ylikorkala 教授の招請講演と石川先生の会長講演が行われた。GnRH neuron に関する世界的権威である Catt 教授は GnRH neuron の視床下部への migration 機構、および GnRH 放出のシグナル伝達機構に関し講演をなされ、会場より喝采を浴びた。また、Ylikorkala 教授は現在更年期医学領域でホットな話題であるホルモン補充療法の心血管障害に対する risk と benefit に関し講演された。石川先生はこれまでの生殖医学領域での研究成果の中から、プロスタグランディン、活性酸素消去酵素、HB-EGF、唾液中性ステロイドホルモン測定法、精子形成遺伝子に関し講演を行った。

シンポジウム１として最近話題になっている生殖補助医療技術が血液キメラを生じる２卵生１絨毛膜性双胎を増加させるか否かに関し、長崎大学の新川教授、宮崎大学の池ノ上教授を座長として議論がなされ、今後さらなる詳細な検討の必要性が示された。また、同日、市民公開講座として北海道大学法学部の東海林邦彦教授が司会をなされ、「生殖医療と法律」と題し、卵子提供、精子提供による体外受精、代理母に関し、法律学者、社会学者、産婦人科臨床医など種々の観点から問題点を浮き彫りにし、今後の生殖医療の進むべき方向性に関し白熱した意見交換がなされた。一般の市民の方にも生殖医療の現在の問題点が理解されたのではないかと期待される。

学会２日目は一般演題74題の他、ハワイ大学柳町教授が「私の研究生活50年で学んだこと」と題し、真摯に研究の歴史を語られ、改めて先生の偉業を認識するとともに、研究への熱い情熱に感動させられた。その他、シンポジウム２「小児の性器異常と生殖予後」では小児の停留睾丸、尿道下裂、性索静脈留、小児癌患者のその後の妊孕性、シンポジウム３「配偶子保存」では卵巣組織の凍結保存、卵子バンク、精子細胞の凍結保存の可能性、シンポジウム４「ART の Quality assurance」では ART 施設の品質管理システムなどに関し産婦人科学会、国、実際の臨床施設の立ち場から報告がなされ議論が展開された。また、スポンサードシ

* 旭川医科大学　産婦人科学講座

ンポジウム「ゴナドトロピン療法の潮流」では安全かつ効率の高い新たな排卵誘発法が紹介された。さらに、上口教授の会長講演「不妊と配偶子染色体異常」では卵子、精子の染色体研究の成果を講演され、染色体核板標本の美しさに魅了された。その他 ART フォーラム、男性不妊症手術手技フォーラムも開催され、その後の懇親会では、400名以上の参加をいただき、北海道の味覚を堪能していただいた。

第３日目は一般演題88題、シンポジウム５「配偶子形成における分子生物学的機構」として無精子症の原因遺伝子、生殖細胞のゲノムインプリンティング、受精過程のエピジェネティクス制御に関する新しい知見が紹介され活発な議論が行われた。シンポジウム６「エンブリオロジストの技術最前線」では ART の技術面に関し白熱した討論が展開された。もう一つのスポンサードシンポジウム「不妊治療における新たなアプローチ」では ART における GnRH アンタゴニストの応用が紹介され、会場から GnRH アンタゴニストの使用許可が早くおりるよう厚生労働省に働きかけるよう求める声が多く聞かれた。

学会中は天候にも恵まれ参加者数は約1300名にのぼり、会場のあちらこちらで「旭岳がすばらしかった」、「美瑛の丘に感動した」などの会話も聞かれた。参加者の先生方には学会だけではなく北海道の自然も楽しんでいただいたものと感じている。

かくして、いろいろ不手際があり学会関係者に多大な御迷惑をおかけしたものと思われるが、何とか学会を終えることができた。本学会が生殖医学の発展に多少なりとも寄与できたのなら、我々教室員も幸いである。

最後に、本合同学会の運営に御尽力いただいた、生物学教室の立野助教授、産婦人科教室の女性陣の諸氏に感謝するとともに、会長招宴でご挨拶をいただいた八竹学長、御援助いただいた旭川産婦人科医会、旭川市医師会の諸先生に心より感謝申し上げます。